

## モンテーニュとブラジル

著者	?岸 敦夫
雑誌名	仏語仏文学
巻	38
ページ	143-157
発行年	2012-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00017259">http://hdl.handle.net/10112/00017259</a>

# モンテーニュとブラジル

高岸 敦夫

はじめに

ブラジルは1500年のペードロ・カブラルのいわゆる「発見」によってヨーロッパ人に知られるようになったが、それから約百年の間に生きた西欧の知識人はこの国から多大なインスピレーションを受けることとなった。16世紀半ばにはブラジルはポルトガル人とフランス人との間でその植民地化を巡って争奪戦が繰り広げられたのだが、この時期にはすでにヨーロッパにおいてブラジルに関する旅行記やイラストが多数出回っていた。本稿ではこのような状況下のブラジルと深い関わりを持った知識人の一人である16世紀フランスの思想家ミシェル・ド・モンテーニュを取り上げ、彼がブラジルをどのように捉えて、それを描写していたのかを論じていく。この時代の多くの文化人と同様に、モンテーニュにもいわゆる「新世界」への憧憬がテキストの至る所に表れているが、その大半はブラジルに関する情報から着想を得たものである。モンテーニュによれば、彼にはブラジルに10年以上も滞在していたという使用人がおり、その男から有益な話を聞きだすことができたのだという。また彼はリオ・デ・ジャネイロ周辺に住んでいたというトゥピナンバ族の三人の男とルーアンで会談したことも語っている<sup>1)</sup>。もちろん彼にとっても新世界はブラジルに限定されるものではないのだが<sup>2)</sup>、ブラジルと新世界が言い換えとして等価的に用いられるほどに、ブラジルは大きな位置を占めているのである。

## I. 食人の国・未来の国

モンテーニュの生きた時代に出回ったブラジル人のイメージは概して

「おぞましい食人の習慣を持った野蛮人」という侮蔑的な眼差しに満ちたものであった。当時のヨーロッパでは新世界には食人風習を持った民族が至るところにいると信じていたが<sup>39)</sup>、トゥピナンバ族はそのような食人に恥る野蛮で未開な部族を代表するものとしてしばしばその名前が言及されている。16世紀の間にもトゥピナンバ族に捕えられ彼らと共に9カ月生活したというハンス・シュターデンの旅行記を始めとしてアンドレ・テヴェ、ジャン・ド・レリー、フィリッポ・ピガフェッタなどのブラジルに係わる書物が多数出版されたが、そこには必ず彼の地での食人風習が描写されている。モンテーニュもこのような「ブラジル人=食人族」というイメージを流通させた人物の一人であり、モンテーニュは彼らに対して今日「人食い」を意味する言葉である「カニバル」(cannibales)という呼び名を使っている。1580年に公刊された彼の『エッセー』の中でもとりわけ有名な1篇である第1巻第30章の「カニバルについて」<sup>4)</sup>でも次のような彼らの食人習慣が語られている。

それから捕虜の男を焼いて、それを皆で食べ合い、不在だった友にも分け前を送る<sup>5)</sup>。

しかしながらモンテーニュは彼らの習慣をおぞましいものと決め付けず、復讐の手段として妥当な行為ではないかと理解を示そうとする。そして彼はヨーロッパにおける残虐行為と比較して、彼らを野蛮ということはできないとするのである。むしろカニバルたちが従来のやり方をやめて、上半身生き埋めにして矢を浴びせた上に絞首刑にするというポルトガル人の残忍な捕虜虐殺の方法を取り入れてしまったことを残念がるのである<sup>6)</sup>。そのうえ彼はカニバルの社会を次のように極端に理想化してさえもいる。

私はプラトンにこう言いたい。「この国にはいかなる不正の余地がない。いかなる行政官の名前も政治的優位もない。奉仕も富も貧しさもない。

契約も相続も分配もない。仕事ものんびりしたものしかないし、共同体への尊敬はあっても親族に対しての尊敬はない。衣服も農業も金属もない。ワインや小麦の使用もない。嘘、裏切り、偽り、強欲、欲望、誹謗、許しを意味する言葉など聞いたこともない<sup>7)</sup>。

これはウィリアム・シェイクスピアが『テンペスト』において引用したことでも知られる有名な個所であるが<sup>8)</sup>、モンテーニュはカニバルの世界をこのような地上の楽園のように描くのである。モンテーニュは「レイモン・スボンの擁護」(第2巻第12章)でもブラジル人の生活について類似したことを書いているが、そこには「ブラジル人は老衰でしか死なない」という文言まで見られる<sup>9)</sup>。このような楽園のイメージはその源流をたどると古代ギリシアにまで及ぶものであるが、モンテーニュ自身は先の引用文の直前で次のようなことを述べている。

このことをリュクルゴスやプラトンが知らなかったことが残念に思われる。なぜなら我々が実際にその国で見たものは、黄金時代を美化しているあらゆる詩の描写や人間を幸福な状態にするためのあらゆる発明を凌駕するばかりでなく、哲学の観念や欲望でさえも超えているのである<sup>10)</sup>。

モンテーニュは新世界を古代ギリシアの人々が想像した理想郷と関連づける風潮を否定する。彼にとってカニバルの生活は古代ギリシアのイメージーションをはるかに凌駕するものだというのである。しかしそれにもかかわらずモンテーニュのカニバルの生活に関する記述は彼が否定するものを連想させるものである。例えば古代ギリシアの叙事詩人ヘシオドスの『仕事の日』で言及されている5つの時代のうち最も古い「黄金時代」は次のようなものがある。

心に悩みもなく、労苦も悲歎も知らず、神々と異なることなく暮らし

ておった。

惨めな老年も訪れることなく、手足はいつまでも衰えず、あらゆる災厄を逃れて、宴楽に耽っていた<sup>11)</sup>。

このようにモンテーニュが描くカニバルの生活はヘーシオドスの黄金時代のそれと大して変わらない。そこには私有財産は存在せず、すべてが共有財産であり、労苦や病気に苛まれることもない。無垢なる人々が自然の恵みを享受するだけで事足りる生活を送るのである。このような異境の地を古の黄金時代のように描いているのは何もモンテーニュに限ったことではない。石原保徳らが指摘するように、このような見方は当時の旅行記などに頻繁に見受けられるものであり、むしろ典型的なステレオタイプだとさえいえる<sup>12)</sup>。例えばカブラルのブラジル発見とほぼ同時期に南アメリカの沿岸を航海していたとされるアメリゴ・ヴェスプッチも新世界の住人について次のようなことを述べている。

かれらは毛織物も、一切必要ないので持っておりません。また私有の財産というものがなく、すべてが共有になっています。彼らには国王も官憲もなく、各人自らのあるじです<sup>13)</sup>。

またブラジル人を想定したものではないが、新世界におけるスペイン人の蛮行を非難したバルトロメ・デラス・カサスの「インディアスの破壊についての簡潔な報告」で描かれているインディオの生活ぶりも同様のことが書かれている。

彼らは世界でもっとも謙虚で辛抱強く、また、温厚で、口数の少ない人たちで、諍いや騒動を起こすこともなく、喧嘩や争いもしない。そればかりか、彼らは怨みや憎しみや復讐心すら抱かない。[中略]

インディオたちは粗衣粗食に甘んじ、ほかの人々のように財産を所有しておらず、また、所有しようとも思っていない。したがって、彼

らがぜいたくになったり、野心や欲望を抱いたりすることは決してない<sup>14)</sup>。

以上の引用文に見られるように、自分たちの側にあるものの存在を否定するというレトリックによって、新世界は黄金時代のようなものとして表象されるのである。このようなヨーロッパ人の異世界に対する心象はルネサンス期にとどまらず、啓蒙主義時代や19世紀を超えて、20世紀以後になっても根強く残っている。例えばブラジル論の古典として知られるシュテファン・ツヴァイクの『未来の国ブラジル』にも次のような記述がある。

ヨーロッパに比べ、周囲の雰囲気は緊張の度合いが低く、人間が平和で、差別も激しくない。自然がより身近に存在し、時間も過密ではなく、全精力を限度いっぱい振り絞ることもない。人々は平和にそれゆえ人間的に生活し、米国のように機械化、標準化されず、ヨーロッパのように政治に過度に刺激され、毒されていない。人々の周囲に空間があるので、お互いにせかせかして肘を突き合わせることもないし、ここには未来があるので、雰囲気は平静で人々はあまり心配したり、いらいらしたりしない<sup>15)</sup>。

ツヴァイクはナチスの脅威や第二次世界大戦の惨状に直面するヨーロッパを後にしてブラジルに移住したのだが、それは宗教戦争に直面したモンテニュラルネサンス期の人々の状況と重なり合うものであった。ブラジルは歴史が浅く未発達であるが、それゆえに大きな将来性がある。そのようなことを意味して彼はブラジルを「未来の国」と呼んでいる。そこでのブラジル人はモンテニュラが想像した太古の時代の人々ではなく、もはやカニバルではない。しかし古き良き時代を今に持つ国だとするその視座はモンテニュラのそのの繰り返しに他ならない。彼はモンテニュとは違って、ブラジル政府の支援を受けてブラジル各地を取

材するなど、直接的にブラジルを見聞きし体験している。しかしそれでも結局彼のブラジル感はヨーロッパ人が長年培ってきたステレオタイプと共存し続けるのである。

モンテーニュの「食人族について」は自民族中心主義批判の好例として読まれることが多い。例えば末松壽はモンテーニュのテキストについて、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』におけるロビンソンとフライデーとの植民地主義的関係を引き合いに出しながら、次のように結論付けている。

『エッセー』には、そのような他者を自己に同化するという攻撃性—なぜなら同化とは文字通り消化し、自己の血肉と化すことである—はない。他への参照をもって自己を省りみるというむしろ逆の、転倒した価値論的誘惑を疑うことすらできる<sup>16)</sup>。

しかしながらモンテーニュに見られるような異郷の地を自らの理想とする世界のイメージと重ね合わせるという行為を厳しく批判する声も現れるようになった。こうしたイメージは一見すると彼らに敬意を払っているようにも思われるが、結局は身勝手な自民族中心主義の産物でしかないというのである<sup>17)</sup>。異質な他者を参照し自己を相対化しようとする彼の思考の先見性や有用性によって今日でも高く評価される「カニバルについて」であるが、その一方でそこでのブラジルはモンテーニュ自身が追いつめる姿と同化させられたものであるということには留意が必要である。

## II. 人食いの神話

新世界に対する黄金時代的描写の例が示唆しているように、実際に現場を見てきたことを強調するものの場合でも、その異文化の表象は往々にして既存のステレオタイプによって構成されているのである。こうした異文化への認識の問題はサイドの『オリエンタリズム』以降すでに

様々な指摘がなされているが、先ほど取り上げた末松壽の論文においても、コロンブスとアメリカの先住民との接触を例にして、次のようなことが述べられている。

実際には全く新たに見、聞き、触れさえするアメリカ大陸とのまさに特権的な対面に際して、古い伝承の与えたイメージが決定的に重い影を落としているのである。直接の体験こそが最高の認識方法だと信じる者にとっては情けないことに、実際には感覚は情報によって曇らされる<sup>18)</sup>。

このような問題はとりわけ食人に関する記述で近年大きく取り上げられ、論争にまで発展している。アメリカの人類学者ウィリアム・アレンズはその著書『人喰いの神話』においてこれまでの文献の中にあらわれる人食いの報告の信憑性に疑問を呈し、結局それは神話にすぎないのではないかと主張した。アレンズの主張は大きな物議を醸したが、彼はその例としてトゥピナンバ族の食人風習についてかなり大きく採り上げている。アレンズは食人風習の叙述があたかも自分がその目で見てきたかのように書いているにもかかわらず、そこでの会話の語句が似通ったものであることに着目する。例えばアンドレ・テヴェ『南極フランス異聞』とジャン・ド・レリー『ブラジル旅行記』ではマルガジャという部族の捕虜がトゥピナンバの人々に殺されて食べられる場面があるが、アレンズはそこでのマルガジャの男の台詞を組上りにのせて自説を展開するのである。テヴェの方はマルガジャの男は殺される当日に歌い続けていたという次のような歌を収録している。

おれの仲間のマルガジャス [マルガジャ] 人は善良で戦いに強いぞ。敵どもを大勢捕えて食ったのだぞ。その敵どもはいずれ好きな時に俺の肉を食うだろうよ。だが俺も、ここでこうして俺をとらえている奴らの親兄弟や仲間を殺して食ったのだぞ。



そしてその男はテヴェ本人に「仲間たちが復讐する」と答えるのである<sup>19)</sup>。対してレリーの方のマルガジャの男の台詞は次のようなものである。

お前の親父を食ったっけなあ、[中略] お前の兄弟をぶっ殺して焼き肉にしたのは俺様だぜ [中略] おれが死んだら、おらが国のマルガジャはその仕返しに、とっ捕まえた奴はみんな食っちゃうぞ<sup>20)</sup>。

レリーは『ブラジル旅行記』の序文でテヴェの旅行記は嘘にまみれた出鱈目なものであると弾劾している。レリーはテヴェが事実ではないことを書いているという指摘に加えて、トゥピナンバ語の基本的表現にすら全く無知であったことを明らかにしている。レリーは自分の記述が「これは確かな知識に基づいて、つまりこの目で見、体験したこと、いやおそらく今まで誰も私ほど突込んで観察したことのないこと、ましてこれについて書かれたものは何もない」とまで言っている<sup>21)</sup>。しかしそれにもかかわらず先に引用した二人の文章は極めて類似したものとなっている。アレンズはテヴェやレリーのこの記述を先行する旅行記からの剽窃したのではないかと推測する<sup>22)</sup>。アレンズはハンス・シュターデンの旅行記での報告をこうした食人の光景のオリジナルと呼べるものだとしているが、同時にシュターデンの目撃談の信憑性も怪しいものだと指摘する。アレンズは彼がインディオ同士の会話の詳細を理解しているうえに、本が出版されたのはヨーロッパへの帰還から9年後であることに疑問を呈するのである。アレンズはシュターデンが彼らに出会う以前からトゥピナンバ族の人食いのイメージを持っていた、そしてインディオの会話ははるか昔のことを想像して書いた創作だと結論付けたのである<sup>23)</sup>。アレンズは例として挙げていないが、モンテーニュのテキストにおける捕虜の言葉にも同様に類似した表現がある。

これらの筋肉、この肉体や血管はお前たちのものだ。哀れな馬鹿ども

だ。お前たちの先祖がここにいることに気付かないのか。良く味わうことだ。お前たち自身の肉の味がするのが分かるからな<sup>24)</sup>。

アレンズの立場からするとモンテーニュのこの記述もまた出典を隠して盗用したものになるであろう。しかしモンテーニュの方は自分が持っている情報は他の学者が書いた書物よりも信頼のおけるものだとしている。モンテーニュはブラジルに行ったことはないが、モンテーニュの記述は十年以上ブラジルに住んでいたという使用人の話や彼がルーアンで三人のトピナンバ族の男と会談を基にしたものだという。そしてモンテーニュは彼の使用人は単純で余計な事を語らない人間であるため、学者の言葉よりも信用できると主張する。

私の使用人だった男は単純で粗野な男だったが真実を話す証人として申し分ないものだった。というのも賢い人間はより好奇心目でもって、より多くのことを記述して、膨らませるのである。彼らは自分の解釈を価値あるものに見せて、それを説得させようとするために歴史を少しばかり歪曲するのである。[中略] こうして私はこの情報に満足していて、宇宙形状誌学者（コスモグラフ）など気にしなくていいのである<sup>25)</sup>。

このようにモンテーニュは書物で得る知識よりもブラジルに行ったことのある人間と話をするなど体験を優位なものとするのである。そのためか彼は同時代人が書いた旅行記を参考文献としてその名を挙げることはしないのだ。彼がここで非難する宇宙形状誌学者とはテヴェのことを指しているといわれている<sup>26)</sup>。確かにモンテーニュの文章はテヴェとは違ってブラジル人に対して侮蔑的感情をあからさまに吐露することはない。そのため一見すると二人の文章は対照的なもののようにも見える。しかしモンテーニュの主張とは裏腹に、モンテーニュとテヴェのブラジル人の生活描写が類似していることは先の引用文が示す通りである。

食人の描写に関してのモンテーニュとテヴェの語句の類似についても一例挙げておこう。モンテーニュは食人の動機について次のように述べている。

我々が思っているようなこととは違って、スキタイ人がかつてしたような栄養補給のためではなく、最上の復讐を表現するためのものである<sup>27)</sup>。

一方テヴェの方にも「未開人たちが行く最も残酷で最も敵を貶める最高の復讐は、敵の肉を食べることである」<sup>28)</sup>と「スキタイには食人族という民族がいて、このアメリカ人たちと同じように人間の肉を常食としていた」<sup>29)</sup>という記述が見られる。つまりモンテーニュの表現はテヴェの次の二つの文章を組み合わせれば作ることができるものなのである。ここでいうスキタイ（スキュタイ）人とは紀元前6世紀から黒海北岸を支配していた騎馬民族であるが、古代ギリシアにおいての異民族（バルバロイ）、つまり野蛮な他者の代表する名前であった。前5世紀の古代ギリシアの歴史家ヘロドトスはスキタイに関して次のように述べている。

アンドロパゴイ人の風習は世にも野蛮なもので、正義も守らねば何の掟もたない。遊牧民で、服装はスキュタイ人によく似たものを用い、独特の言語をもつ。ここに述べる民族の中では、彼らだけが人肉を喰らう<sup>30)</sup>。

これはアレンズが食人についての最も古い記録として挙げている個所でもある<sup>31)</sup>。アンドロパゴイとはギリシア語で文字通り「人食い」を意味する言葉であるが、ヘロドトスはスキタイ人に類似した民族として、彼らの奇妙な風習を叙述するのである。ヘロドトスのように食人風習を語る時にスキタイ人を引き合いに出すことは16世紀の書物にもしばしば見られるものである<sup>32)</sup>。モンテーニュはカニバルの食人風習はスキタイ

人のそれとは全く異質なものと見なしているのだが、スキタイ人を引き合いに出すこと自体、彼の食人言説が定型に囚われていることを示している。そしてさらに問題となるのが、スキタイ人が人間を常食していたという前提をモンテーニュが何ら疑わなかったことである。「スキタイ人が人肉を常食している」という常套句の大本はヘロドトスになるのであるが、ヘロドトス自身はスキタイ人の食人習慣を認めていない。つまりヘロドトスが述べている様々な民族をスキタイ人として一括りにし、さらにアンドロパゴイ人特有の習慣とされるものをスキタイ人全体の習慣として一般化したことになる。ここからもモンテーニュも食人について語るとき、当時の食人言説のレトリックに支配から逃れられなかった、同時代人と見方を共有していたということが示されているのである。

### Ⅲ. 自然と人為

モンテーニュの「カニバルについて」には様々な二項対立が見られるが、その多くは「自然」(nature)と「人為」(art)の対立に対応したものである。モンテーニュはプラトンの『法律』の対話から次のような自然観を引用している。

すべてのものは、自然か、偶然か、人為のいずれかによって作られている。最も偉大で美しいものは前の二つのどちらかで、最も取るに足らなくて不完全なものは後者によって作られる<sup>33)</sup>。

これはプラトンの主張というよりソフィスト達が述べている当時のアテナイの思潮を述べたものであるが<sup>34)</sup>、モンテーニュはこの価値観に合わせてカニバルの楽園ブラジルを描写するのである。実在するカニバルの生活やブラジル帰りの男の話、モンテーニュの実体験は自然に即するものとして優位なものとして扱われる。その一方で古代ギリシアの人々のイマジネーションや宇宙地誌学者の記述は人為的であるため劣るものとされるのである。「カニバルについて」において頻出する語句であり、

野蛮な人や行為を形容する «barbare» や «sauvage» も基本的にはこうした二項対立に呼応する語であるが、やや注意が必要である。というのも彼のテキストにおけるこれらの言葉の意味はアンビバレントなものである。カニバルに対して «barbare» や «sauvage» という語を形容するかと思えば、それを否定して逆にヨーロッパ人に投げかけてもいるのである。

聞くところによれば、この国には野蛮 (barbare) で乱暴 (sauvage) なところが何もない。自分の習慣にないものを野蛮 (barbare) と呼ぶのなら別だけれども。[中略] 彼らは野生 (sauvage) であるが、それは各々普通の進行によって発育する自然の果実が野生 (sauvage) と呼ばれるのと同じだからである。本当は、我々が技巧によって変質させ、共通の秩序を捻じ曲げることこそ野蛮 (sauvage) と呼ぶべきものなのではないか<sup>35)</sup>。

このようにモンテーニュにおいてこれらの語の使用は非常に錯綜したものになっており、«barbare» や «sauvage» は自然に寄り添うものとして使われる場合は肯定的に扱われる。その一方でヨーロッパ人にこれらの語を投げかける場合は「自然なものではない」という含意を持つものである。いずれせよギンズブルグが指摘するように<sup>36)</sup>、どちらの側が «barbare» や «sauvage» であるにしても、これらの語は私たちと彼らの距離を表すものになっている。そしてこのことはモンテーニュの自然感が異質な他者への心象とプラトンが言及しているアテナイ人の自然観とないまぜになっていることを示している。

彼のこのような自然観に基づく強引な分類は必然的に矛盾を生み出すことにもなっている。モンテーニュのカニバルに関する記述は、彼の主張とは裏腹に、彼が批判するもののそれに類似してしまうのである。ブラジル帰りの男やフランスに來たトゥピナンバ族の男から聞くなど直接的な体験を強調する彼の文章も、実際にはテヴェエやレリーからの盗用と疑われても仕方がないほど似通った部分がある。また彼は古代のギリシ

ア人が述べていることとカニバルの世界との関連性を終始否定していくのだが、実際には古代ギリシア人が夢見た理想郷を基にしてカニバルの生活を描写するのである。さらにまたこのエッセーの基本的なコンセプトである自然と人為の対立自体も古代ギリシアの伝統的な価値観を取り入れたものにすぎない。結局のところモンテーニュのブラジルは古代ギリシアにまでさかのぼるヨーロッパの伝統的な思潮や言説を再構成してできたものなのである。

おわりに

本稿ではモンテーニュにおけるブラジルの表象が、彼自身が主張することに反して、同時代人が書いた旅行記などと情報や言説を共有していること、さらにそれが古代ギリシアの価値観や他者感と密接に結びついていることを論じた。しかしここでは彼の重要な要素である文化相対主義についてほとんど取り上げることがなかった。彼の相対主義は本稿でも指摘したテキスト間の矛盾をより複雑にする要因となっているのだが、同時にブラジルと食人との関係の考察から生まれた20世紀の食人言説の先駆的な見方を作り上げてもある。次回ではモンテーニュのこうした文化相対主義と食人言説の関係性について論じていくことにしたい。

(博士課程後期課程)

注

- 1) Montaigne, Michel de, *Les Essais*, Gallimard, 2007
- 2) 「馬車について」(第3巻第6章)というエッセーで新世界でのスペイン人の蛮行を非難するなど、モンテーニュの『エッセー』においてスペイン語圏のこともしばしば取り上げられている。
- 3) Cf. オビエード『カリブ海植民者の眼差し』アンソロジー-新世界の挑戦4、柴田秀藤・篠原愛人訳、岩波書店、1994、p.147。「これらの地方 [アメリカ大陸やカリブ海諸島] では、人間をいけにえにするのは日常茶飯事で、人肉を食べるのも、フランスやスペインやイタリアで羊や牛の肉を口にすると同じくらい、ごく普通のことなのである。」
- 4) 従来、多くの邦訳で採用されてきたいわゆる「ボルドー版」ではこの章は第1巻

第31章として扱われていたが、ここでは近年出版された Gallimard (2007) 等が採用している1595年版に合わせて第30章と表記する。また原題は「Des Cannibales」であり「食人種について」などと訳されてきたが、ここでは「カニバル」という語が鍵概念の一つでもあるので「カニバルについて」と表記する。

- 5) Montaigne, *op.cit.*, p.215.
- 6) *Ibid.*, pp.215-216.
- 7) *Ibid.*, p.212.
- 8) Shekespeare, William, *Tempest*, Oxford University Press,1987, p.135., II - i , 145-154.
- 9) Montaigne, *op.cit.*, p.517. 「ブラジル人について伝えられていることだが、彼らは老衰でしか死なないのだという。それはその空気が澄んでいて平穏だからだとされているが、私はむしろ彼らの魂が澄んでいて平穏だからだと思う。彼らの魂はピリピリとして不愉快なあらゆる情念や思考、仕事というものから解放されているのだ。彼らは文字も法律も王もいかなる宗教もない驚嘆すべき単純さと無知の中で生活を送っている人々なのである。」
- 10) *Ibid.*, p.212.
- 11) ヘーシオドス『仕事と日』松平千秋訳、岩波書店、1986、p.25.
- 12) 石原保徳「新世界としてのアメリカ」、歴史学研究会編『「他者との遭遇」南北アメリカの500年 第1巻、青木書店、1992
- 13) ヴェスプッチ、アメリゴ「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」長南実訳、『航海の記録』大航海時代叢書第Ⅰ期第1巻、岩波書店、1965、p.329.
- 14) ラス・カサス『インディアスの破壊についての簡潔な報告』、柴田秀藤訳、岩波書店、1976、p.18.
- 15) ツヴァイク『未来の国ブラジル』、宮岡成次訳、河出書房新社、1993、pp.155-156.
- 16) 末松壽、「人食いについて」山口大学人文学部異文化交流研究施設編『異文化研究』、2010、p.30.
- 17) Cf. 山中速人『イメージの「楽園」』筑摩書房、1992
- 18) 末松壽、*op.cit.*, p.23.
- 19) テヴェ、アンドレ『南極フランス異聞』山本顕一訳、『フランスとアメリカ大陸一』大航海叢書第Ⅱ期第19巻、岩波書店、1982、p.322.
- 20) レリー、ジャン・ド『ブラジル旅行記』二宮敬訳、『フランスとアメリカ大陸二』大航海叢書第Ⅱ期第20巻、1987、p.223.
- 21) *Ibid.*, p. 50.
- 22) Cf. Staden, Hans, *Voyage, relations et memoires originaux pour server a l'histoire de la decouverte de l'Amérique*, Kessinger Publishing, 2010, p.193. 「『そうだ。我々は勇

敢な男として敵を捕まえ食べてきた。お前たちは我々を打ち負かし捕虜にした。勇敢な男は敵の地で死なねばならぬ。我々の国は大きい。仲間が仇を取ってくれるだろう。他のものが彼らに答えた。『そうだ、お前たちは我々の仲間をたくさん殺した。その復讐だ。』』

- 23) トッピナンバ族の食人風習に関してアレンズの説に対する異論もある。マーヴィン・ハリスはシュターデンがトッピナンバ語に精通していた可能性を示唆し、その記述には信憑性があるという反批判をおこなっている。Cf. ハリス、マーヴィン『食と文化の謎』、板橋作美訳、岩波書店、1988
- 24) Montaigne, *op.cit.*, p.219. モンテーニュの文章がテヴェに類似していることについてはすでに多くの指摘がなされており、例えば齊藤広信はこの歌の例を取り上げてモンテーニュの記述がテヴェから借用であることをほのめかしている。(Cf. 齊藤広信「食人種について」の一考察」、『日本女子大学文学部紀要28』、1978).
- 25) *Ibid.*, pp.210-211.
- 26) Cf. 鍛冶義弘「ラブレールとモンテーニュにおける他者認識」『大坂府立大学紀要(人文・社会科学)』42、1994
- 27) Montaigne, *op.cit.*, p.215.
- 28) テヴェ, *op.cit.*, p.317.
- 29) *Ibid.*, p325.
- 30) ヘロドトス『歴史 中』松平千秋訳、岩波書店、1973、p.63.
- 31) アレンズ, *op.cit.*, p11-12.
- 32) 他の例として、バリャドリッド論争でラス・カサスと対決したファン・ヒメス・デ・セプールベダの記述を挙げておく。彼はインディオの奴隷化を擁護する論拠として彼らの食人風習を挙げているがその中には次のような表現が見られる。「彼らは敵を捕まえて、その肉で自分たちの驚くべき食欲を満たさないと、たとえ戦争に勝利しても、まったく空しいことだと考えるほど、狂ったように、たがいに絶え間なく戦いを繰り返していたのです。その残忍さは身の毛もよだつほどで、これまた人肉を食していた、あの想像を絶するほど獷猛なスキタイ人ですら、比較にならないほどです。」(セプールベダ『征服戦争は是非か』アンソロジー新世界の挑戦7、柴田秀藤訳、岩波書店、1992、p. 104).
- 33) Montaigne, *op.cit.*, p.212.
- 34) プラトン『法律』森進一・池田美恵・加来彰訳、『プラトン全集13』、岩波書店、1976、p. 593-599.
- 35) Montaigne, *op.cit.*, p.211.
- 36) ギンズブルグ、カルロ『歴史を逆なでに読む』上村忠男訳、みすず書房、2003、p.184.